

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第46集

市内遺跡発掘調査概要報告書 XI

日 向 国 分 寺 跡

2006

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では市内遺跡発掘調査事業として、平成7年度より日向国分寺跡の確認調査を実施してまいりました。この確認調査も今年度で第11次を迎え、昨年度までの調査の結果、2時期の推定講堂跡、3時期の回廊及び中門跡、2時期の推定食堂ないし僧坊跡、回廊外側を廻る区画溝跡、主要伽藍に取り付く西門跡（伽藍西門跡）などを確認することができました。

今年度は昨年度までの調査により大凡の主要伽藍配置が想定されたことから、過去の調査時に国土座標が設置されていなかった箇所の再測量を行いました。また、推定講堂跡及び伽藍西門跡間の農業用倉庫の解体に伴い倉庫下の遺構残存状況の確認を実施することができました。これらの調査に併せ、以前から伝塔芯礎とされてきた礎石の形状を確認するため、礎石の調査を実施しました。

調査の結果、推定講堂西側の調査区からは方形の柱掘り方を有する南北柱穴列を検出することができました。南北方向に柱穴列が検出されたことから回廊は金堂や講堂に取り付く構造でないことが明らかになりました。また、伝塔芯礎は元位置を保っていると予想され、金堂南東隅の礎石である可能性が高くなりました。

また、遺構の座標計測を実施し、過去の調査により検出されてきた遺構を国土座標上で管理することにより、伽藍中軸線の復元なども可能になりました。

これら調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なことがあります。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたりご指導・ご協力いただきました調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化財課をはじめ、発掘調査・整理作業に携わっていただきました方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成18年3月31日

西都市教育委員会

教育長 三ヶ尻 茂樹

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受け、平成17年度実施した市内遺跡発掘調査（日向国分寺跡）の概要報告書である。
2. 平成17年度の調査は、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡2地区の確認調査を実施した。調査は平成17年5月24日から平成18年3月末まで実施する予定である。したがって、報告書の内容は2月末現在での内容を記した。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等は、笠瀬明宏が担当した。遺構のトレースは笠瀬明宏が実施した。
5. 本書の執筆・編集は、笠瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位は、全て平面直角座標系第II座標系である。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 本文中の(註)は第II章に全てをまとめて記した。

目　　次

第Ⅰ章　序　　説	
第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の体制	1
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境	2
第Ⅲ章　日向国分寺跡の調査	
第1節　これまでの調査結果と概要	4
第2節　調査区の設定と遺構	7
第3節　小結	12
報告書抄録	

挿図目次

- Fig. 1 日向国分寺跡周辺位置図(s=1/25,000)
Fig. 2 日向国分寺跡第11次調査箇所位置図(s=1/500)
Fig. 3 A区1 トレンチ平面実測図(s=1/40)
Fig. 4 A区2 トレンチ平面実測図(s=1/40)
Fig. 5 A区3 トレンチ平面実測図(s=1/40)
Fig. 6 B区平面実測図(s=1/100)

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

日向国分寺跡の調査は、西都市教育委員会が平成7（1995）年度より確認調査を始める以前に過去4度の調査が実施されていた。それは、昭和23（1948）年度に駒井和愛教授を団長とし、主として早稲田大学で組織された日向考古調査団⁽¹⁾、その後、昭和36（1961）年度に九州大学及び宮崎県教育委員会、昭和47（1972）年度に宮崎県教育委員会及び西都市教育委員会、平成元（1989）年度に宮崎県教育委員会による確認調査である。しかし、それら調査では伽藍配置について明確にされておらず、平成元年度の調査で僧坊跡ないし食堂跡と推定される2時期の掘立柱建物跡が確認された程度であった。

当地域は、昭和36年度当時の周辺写真と現在を比較すると寺城内外の宅地化が著しく、伽藍配置の確認が急務となつた。このことから、西都市教育委員会は平成7年度より国庫補助を受け、日向国分寺跡の主要伽藍配置及び寺城の確認調査を実施してきた。今年度も、この継続事業として確認調査を実施した。

第2節 調査の体制

調査主体	教育長	三ヶ尻 茂樹
	文化課長	伊達 博敏
	同 補佐	村岡 満徳
	同 係長	蓑方 政幾
	同 主査	重永 浩樹
	同 主事	津曲 大祐

調査員 文化課主事 签瀬 明宏

調査指導	小田 富士雄（福岡大学名誉教授）
	山中 敏史（独立行政法人 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター）
	箱崎 和久（独立行政法人 奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部）
	柴田 博子（宮崎産業経営大学助教授）
	日高 正晴（西都原古墳研究所長）
	石川 悅雄（宮崎県教育庁文化財課主幹）
	吉本 正典（宮崎県教育庁文化財課主査）

発掘作業員 井上六男・押川ツル・諸方タケ子・金丸美保・黒木トシ子・児玉征子・篠原時江・長谷川クミエ・浜田スミ・疋田はる子・横山ナオ子

整理作業員 奥野和子・狩野由美・中原昭美・那須眞紀子・長谷川明美

以上、敬称略

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西、標高50～80mには通称西都原と呼ばれる台地がある。この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地で台地東側には南北帯状に標高約20～30mの中間台地が延び、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。西都市街地はこの沖積平野に位置し、この平野の北から東側を宮崎県で第3位の水量を誇る一ツ瀬川が蛇行する。

西都原台地及び中間台地上には、陵墓参考地である男狹穂塚・女狹穂塚を始め、前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された国指定特別史跡：西都原古墳群が所在する。これら古墳の他に、南九州的墓制とされる地下式横穴墓が現在までに12基、斜面に墓道が斜めに穿たれ、それに玄室が取り付く横穴墓と地下式横穴墓の折衷型とされる横穴墓群も確認されている。

西都原台地の北西端には、縄文早期の集石遺構及び後期の土器片・土錐が多量に検出された宝財原遺跡、台地北東端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての堅穴式住居跡20軒などが検出された集落跡である新立遺跡などが所在している。西都原台地が墓域として選地されてた結果、台地上の生活遺構は極端に減少するが、台地南端の寺原集落には古墳時代の大集落跡が拡がっていたと予想されている。

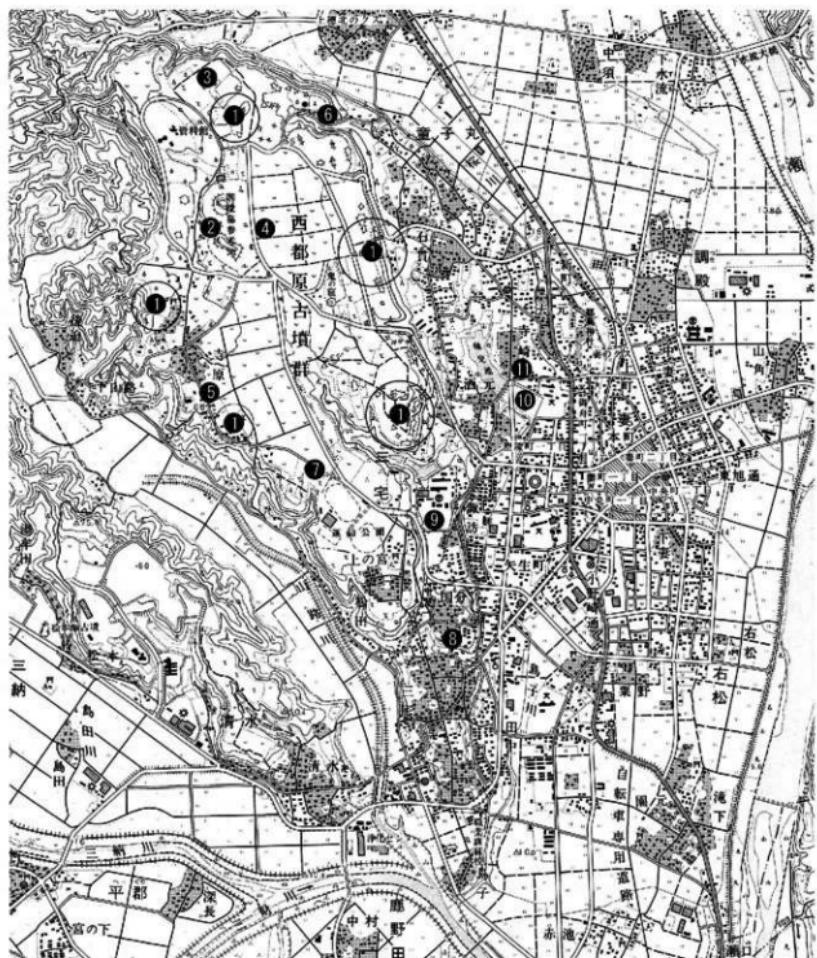
西都原台地北東側の中間台地には、平成12～13年度にかけての調査で地下式墓寄生型消失円墳や消失円墳を始め、多くの地下式横穴墓が点在していることが明らかになった堂ヶ嶋第2遺跡も所在する。本遺跡の発見により、中間台地一帯が古墳時代終末期の墓域であることも明確になった。

西都原台地の南端には產土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になる。この中間台地上には北東に日向国府跡、中央の妻高等学校敷地内に日向国分尼寺跡（推定）も比定されている。妻高等学校と日向国分寺跡の間には国分遺跡が所在している。この遺跡は地下式横穴墓が2墓寄生している地下式墓寄生型消失円墳1基・消失円墳2基などから構成され、第1次調査では平安期の土器片が土地造成土の中から多量に検出された。また、この南側からは以前、石帶が出土した経緯もある。

日向国分寺跡は、上記のような環境の中の西都原台地と西都市街地の間に南北に延びる中間台地中央に所在する。北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷に囲まれ、寺域は方2町の規模を有すとされてきた。本地域は急速に宅地化が進み、現在、江戸時代中期にこの地を訪れた木喰勘海・上人影像の木喰仏やそれを以前安置していた旧堂宇の基壇跡・金堂跡と推定される地点に数個点在している礎石のみが国分寺の面影を忍ばせる。

国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であり、近年、宮崎県教育委員会の調査により国分守跡から北東に直線距離で約1.2kmの寺跡・法元地区に日向国府跡の所在が確定された。国府跡については正殿と脇殿がコの字型配置をとり、西側からは築地塙跡などが確認されている。平成17年7月に中心部の1haが国史跡指定を受け、今後、年次的に用地買収を進める予定である。

このように、西都原台地及びその周辺は縄文時代の生業の場、弥生時代の集落とし利用され、古墳時代に墓域として大古墳群が形成された。その後、台地上は墓域として守られ続け、日向国分寺跡や国分尼寺跡、日向国府跡などを含む中間台地は、古代日向国の政治及び宗教活動の拠点として大いに栄えた地域であった。



1 : 25,000

- 1. 西都原古墳群 2. 陵墓参考地（男狹穗塚・女狹穗塚）
- 3. 丸山遺跡 4. 西都原遺跡 5. 寺原遺跡（西都原地区遺跡）
- 6. 新立遺跡 7. 原口第2遺跡 8. 日向國分寺跡
- 9. 日向國分尼寺跡 10. 妻北低湿地 11. 寺崎遺跡（日向國府跡）

Fig. 1 日向國分寺跡周辺位置図(s=1/25,000)

(註及び参考文献)

- (1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺址」『日向遺跡総合調査報告』第3号 1963
- (3) " 『国府・都衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告書』III 1991
- (4) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書I」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (5) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書II』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (6) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書III』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998
- (7) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書IV』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999
- (8) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書V』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第29集 2000
- (9) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VI』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第30集 2001
- (10) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VII』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第31集 2002
- (11) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VIII』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第36集 2003
- (12) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書IX』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第40集 2004
- (13) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書X』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第41集 2005
- (14) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (15) 西都市教育委員会「宝財原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集 1994
- (16) " 『新立遺跡』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (17) " 『堂ヶ嶋第2遺跡』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第33集 2003
- 堂ヶ嶋第2遺跡では、玄室数で21基の地下式横穴墓を確認した。それらには単独で構築されるタイプと地下式墓寄生型円墳として、円墳下に寄生的に構築されるタイプなどがある。単独で構築される地下式横穴墓は堅坑降口部傾斜角が徐々に倒れていく傾向にあり、堅坑の意味が「被葬者が玄室内に入るために上から下に降ろす坑」から「追葬を行なうあたり墓前祭祀・追善供養などを行う道」へと変化していく課程が想定された。
- (18) 西都市教育委員会「上尾筋遺跡・下尾筋遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第11集 1990
- (19) " 『国分第3遺跡』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第38集 2004
- (20) 江戸時代中期、全国を行脚する木喰勘海上人が口向を訪れた際、国分寺跡に立ち寄った。翌年、火災により荒廃していた伽藍や安置されていた本尊は全て焼失してしまった。そこで木喰勘海上人は国分寺再興の祈願を立て、5軒の彫像に取りかかった。そうして完成した仏像5軒が木喰仏、つまり、木喰五智如来坐像である。
- (21) 宮崎県教育委員会「寺崎遺跡」『国衙跡保存整備基礎調査報告書』2001
- (22) 日向国府跡については約2.0haの国指定を目指しているが、平成17年7月にその内の約1.0haが国指定史跡に指定された。来年度からこの1.0haの用地買収を実施し、再来年度から確認調査を実施する予定である。また、その後、残りの1.0haに関しては随時、指定拡大を進めて行く予定である。
- (23) 註(10)と同じ。
- (24) 註(10)と同じ。
- (25) 註(10)と同じ。
- (26) 註(13)と同じ。
- (27) 奈良市の西隆寺跡で南北に並ぶ2基の大型円形土坑が櫓竿支柱の柱掘り方ではないかとする説がある。

第三章 日向国分寺跡の調査

第1節 これまでの調査結果と概要

日向国分寺跡については前述のとおり、昭和23年度に日向考古調査団、昭和36年度に九州大学及び宮崎県教育委員会、平成元年度に宮崎県教育委員会が確認調査を実施している。昭和36年度は旧五智堂周辺及び推定中軸線と寺域南東側、平成元年度は寺域北側（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。これとは別に昭和47年度には寺域東側の宅地開発に伴い、宮崎県教育委員会及び西都市教育委員会が緊急調査を実施している。昭和23・36年度の調査は短期間であったことから伽藍配置や建物跡については明確にされていないが、平成元年度の宮崎県教育委員会による調査では僧坊なし食堂跡と推定される2時期の掘立柱建物跡が確認されている。これらを受け、平成7年度から西都市教育委員会が確認調査を実施し、今年度で第11次調査となる。

平成7・8年度の調査では推定金堂掘込地業跡・回廊跡・回廊外側に廻らされた溝状遺構が検出されている。平成9年度の調査では主要伽藍西側の回廊に取り付くと予想される四脚門跡、門の前で途切れ、南北に延びる区画溝が検出された。平成10年度の調査では回廊跡が最低でも3時期存在することが明らかになり、主要伽藍南側区画溝の東西幅が81mと判明した。平成11年度の調査では中門跡東半分を検出し、中門も回廊同様に最低3時期存在したことが明らかになった。平成12年度の調査では金堂掘込地業想定箇所を再調査したが、地業跡の可能性は薄いと判断された。また、南門想定箇所からは築地塀の基壇らしき跡が確認でき、調査区東側に南門が所在する可能性が高くなつた。塔想定箇所である主要伽藍南東側では遺構等確認できなかつた。平成13年度の調査では平成元年度に宮崎県教育委員会が調査を実施した僧坊なし食堂跡の未調査箇所を再調査した結果、2時期の掘立柱建物跡であることを再確認した。平成14年度の調査では寺域西端隅の確認調査に限定し、寺域を方2町と想定した場合の南西隅と予想される2箇所の調査を実施した。しかし、寺域端を示すような遺構は確認できなかつた。但し、推定寺域南西端に国分寺と同時期で同一地割りのL字状の溝状遺構を検出した。平成15年度の調査では伽藍中心部の調査を重点的に実施し、方形及び円形の柱掘り方を有する桁行き7間、梁行き3間ないし4間の推定講堂跡の西側3分の1程を検出した。また、伽藍南東側で方形の柱掘り方を有する東西3間、南北3間以上の掘立柱建物跡を確認した。平成16年度の調査では回廊が金堂に取り付く構造であるのかを検討する目的で東西道路南側に所在する平成12年度に確認調査を実施した旧国分公民館跡の調査区を拡大し調査を実施したが、回廊柱穴跡は確認できなかつた。金堂の痕跡を確認する目的で推定金堂跡周辺の調査も実施したが、金堂跡を特定できるような遺構は確認できなかつた。また、推定講堂北西側で東西方向の区画溝が確認され、途中で途切れていることが明らかになつた。推定寺域北西側の宅地造成によりこの地区的調査も実施したが、寺域端を示すような遺構は確認できなかつた。

今年度の調査はこれまでの調査で伽藍内の調査がほぼ終了したことから、過去の調査で遺構に国土座標が設置されていなかった箇所に座標を設置することを最大の目的とし調査を実施した。また、以前から伝塔芯礎とされてきた礎石の是非及び位置検討を行なうため礎石を元位置から移動し、形状及び根石残存状況等を検討した。また、推定講堂跡と伽藍西門間の農業用倉庫が急遽取り壊されたことから推定講堂跡と伽藍西門間の構造を明らかにする目的で調査区を設定した（Fig. 2参照）。

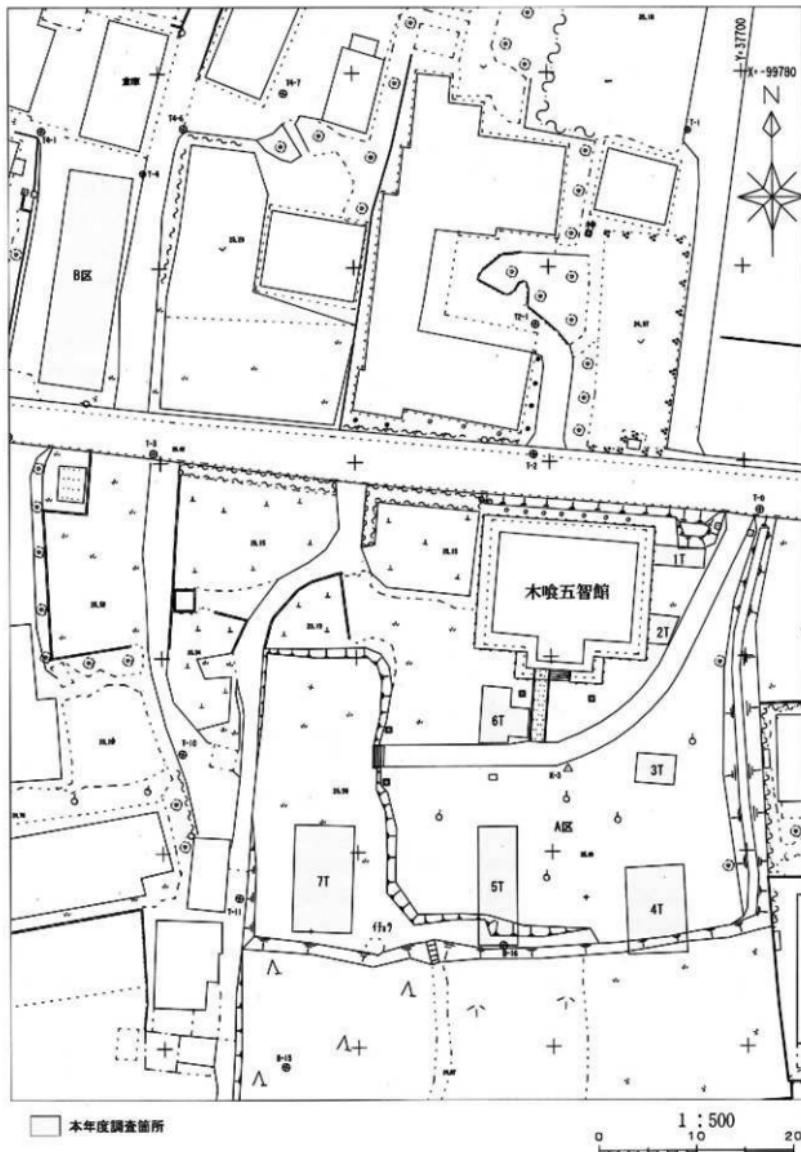


Fig. 2 日向国分寺跡第11次調査箇所位置図 ($s=1/500$)

第2節. 調査区の設定と遺構

《A区の調査》

A区は日向国分寺跡を横断する東西道路南側、現在、県指定美術工芸品木喰五智如来坐像を安置する木喰五智館の東・南及び南西に調査区を設定した。本地区は平成7~11年度までに確認調査を実施し、回廊跡・中門跡・回廊外側を廻る区画溝・2基の大型円形土坑などを確認している地区である。本地区は遺構の残存状況が良好であり、主要伽藍の形状を復元するには最も適している地区であることから各遺構の詳細な座標値を計測する必要があり、過去の調査で国土座標が設置されていなかった遺構に座標値をもたらすこと、また、過去の調査に併せ新たに遺構の検討を実施することを目的とし、合計7本のトレンチを設定した。

これら調査とは別に木喰五智館西側に所在する、伝塔芯礎の調査も併せて実施した。この礎石は以前から塔芯礎とされてきたが、形状や位置に疑問がもたれていた。

以下、各トレンチの調査及び伝塔芯礎について概要を示すこととする。

○1 トレンチ (Fig.3)

1 トレンチは平成7年度の調査でB区6トレンチとして調査された現木喰五智館東側に位置する。トレンチは以前の調査時のトレンチ形状を残すため、南北2.0m、東西5.15mで設定した。

平成7年度の調査時に本トレンチからは主要伽藍東側の回廊外側を廻る区画溝が検出されているが、この溝の南北方向の座標が計測されていなかったことから、溝の南北中心に国土座標を設置することとした。

平成7年度の調査で区画溝の規模は幅約1.6~1.7m、深さ約0.7mであることが確認されており、多くの瓦片等が出土している。当時の調査では区画溝の北壁土層断面図が実測されていたことから、今回は座標設置に併せ、南北区画溝の南壁土層断面実測及び観察を実施した。

区画溝内の十層断面を観察した結果、20層に分層が可能であった。溝内埋土のほぼ中位に水平に堆積する層は下層に瓦片や土師器片を含み、この層のみが人為的な埋土である可能性が高い。それ以外は自然堆積土と判断され、ある時期に人為的に溝底が形成されたようである。この所見は他の区画溝の土層観察からも確認できる。今回の遺構検出面である黒色粘質土上面で溝の肩を検討すると、東西幅は2.36m、深さ約0.95mを測った。

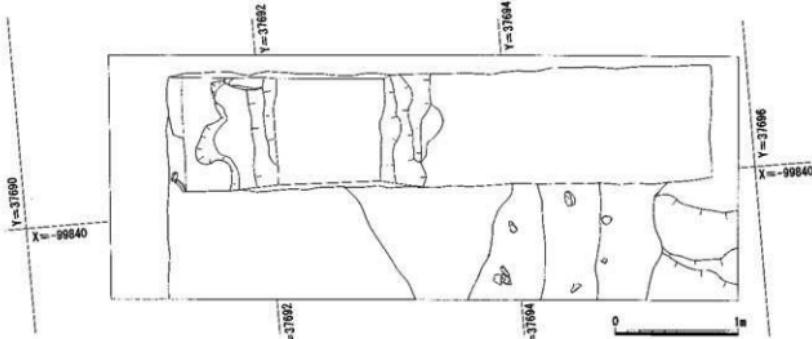


Fig. 3 A区1トレンチ平面実測図(s=1/40)

○2 トレンチ (Fig.4)

2 トレンチは平成10年度の調査時に区画溝の南北方向を確認するため、幅1.0mのトレンチを東西方向に設定し、アカホヤ火山灰層上面で溝の西側肩のみを確認していた。今回は参道ぎりぎりまでを台形状に南北3.0m、東西1.5~2.5mに拡大し、黒色粘質土上面までを掘削した。

この箇所は現国分寺跡の参道が東側に面していることから溝の東側肩は参道下に位置し確認できない。今回、検出した区画溝を溝底まで掘削し、溝の深さの計測と溝内の遺物の図化及び取り上げを実施した。また、溝底中央が検出できることから溝の南北中央に国土座標設置を実施した。

本トレンチ内の西側にはアカホヤ火山灰層上層の黒色粘質土が検出でき、かなりしまりが認められた。平成7年度に木喰五智館基壇下層を調査した結果、基壇東側から回廊の柱穴跡が確認されており、この層の上部に回廊基壇が所在していた可能性が高い。また、溝は西側のみに段がつく2段掘りで掘削され、これは1 トレンチで検出された区画溝とも同形状である。

溝内の埋土からは約60点の瓦片や少量の土師器等が出土したが、現在、整理作業を実施していることから、遺物の詳細については別稿に譲ることとする。

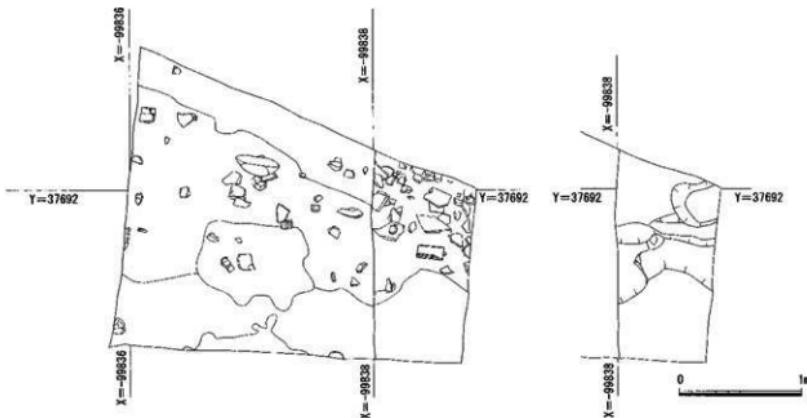


Fig. 4 A区 2 トレンチ平面実測図(s=1/40)

○3 トレンチ (Fig.5)

3 トレンチは2 トレンチで確認した区画溝と平成10年度にA区として調査を実施した回廊南東隅(今年度4 トレンチ)間の区画溝の存否と方向を確認する目的で調査を実施した。トレンチの規模は東西4.0m、南北3.0mである。

調査の結果、現地表面から約40cm掘り下げるとき構造面である黒色粘質土が検出でき、この層の上面、調査区の東により幅2.14mの溝を検出した。深さは黒色粘質土上面から1.15mを測る。溝底の標高は約23.5mを測り、2 トレンチと同程度で1 トレンチで確認した溝底より約40cm低い。

北壁土層堆積状況を観察した結果、埋土上層は人為的な埋土が多く中位に水平面があり、この位置で一度、溝を整形していると予想される。溝底は幅約60cmの平坦で溝の断面形は逆台形である。

溝内の遺物は下層まで包含されており大半は瓦片であったが、遺物の詳細については、現在、整理作業を実施していることから別稿に譲ることとする。

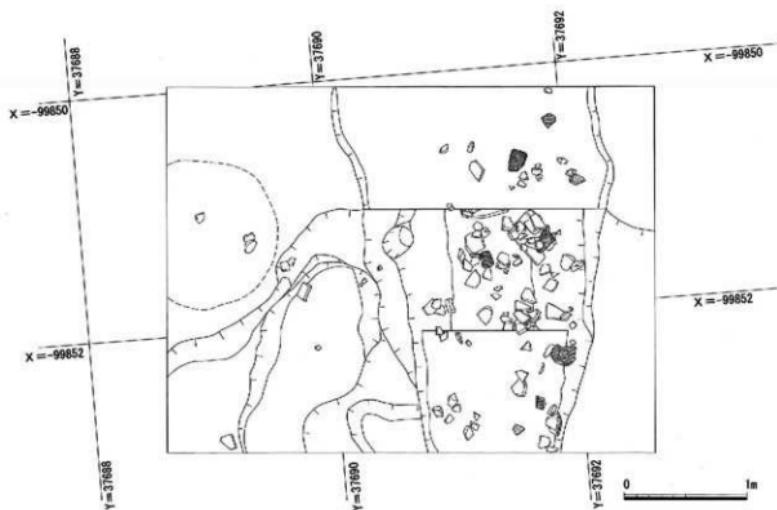


Fig. 5 A区3トレンチ平面実測図(s=1/40)

○4 トレンチ

4トレンチは平成10年度の調査でA区とし調査を実施した調査区西側に該当する。この調査区は伽藍回廊南東隅に位置し、区画溝と回廊柱穴の関係が最も良好に確認できる箇所である。平成10年度の調査では柱穴の切り合いと区画溝廃絶後の柱穴が検出されたことなどから、回廊が3時期存在したことが明らかになっている。

調査区は以前の調査時の調査区の形状を残すため、南北9.0m、東西6.0mで設定した。

今回の調査は回廊柱穴の柱抜き取り穴及び区画溝の中心の座標計測を目的としたことから、新たに調査を実施した箇所はないが、前回の調査区の形状を維持するためにやや広めの調査区を設定したことから、上層の埋土中より9世紀中葉に比定できる7類の軒平瓦1点を含む瓦片等が出土した。⁽²³⁾

○5 トレンチ

5トレンチは4トレンチ同様、平成10年度の調査でA区とし調査を実施した調査区東側に該当する。この調査区も回廊柱穴柱抜き取り穴及び区画溝の中心の座標計測を目的とした。以前の調査時の調査区の形状を残すため、東西4.0mで設定した。また、平成7年度の調査で調査区北側に2基の大型円形土坑が確認されていることから、同様の土坑の有無を確認する目的で北側を新たに4.5m延長し、南北12.0mとした。

北側に延長した箇所については現在も調査中であり詳細は報告できないが、柱穴や土坑等は確認されておらず、川原石や瓦片、土器器片を含む後世の攪乱と予想される2箇所の産みを検出してい。但し、西側の産みには創建期の偏重草文軒平瓦片（1類）⁽²⁴⁾や9世紀中頃に比定できる単弁12葉軒丸瓦片（3類）なども含まれており、大変注目される。⁽²⁵⁾

○6 トレンチ

6 トレンチは平成7年度の調査でB区2トレンチとして調査が実施された折りに2基の径2.0m強、深さ約1.5mを測る大型円形土坑が確認された箇所である。この土坑は前回の調査の折りに全掘されていたが、国土座標が設置されていなかったことから、今回、再度全掘した。土坑東側に同様の土坑の有無を再度確認する目的も併せ、以前の調査のB区4トレンチを含むように、東西3.0～5.0m、南北3.0～6.0mの調査区を設定した。

調査の結果、円形土坑はB区4トレンチ側には確認できず、このような土坑はやはり2基のみである。平成7年度の調査時に周辺も広い範囲で調査が実施されているが、同規模の土坑は確認されおらず、これら土坑の意味については現時点では不明である。但し、昨年度の概要報告書の中で寺域及び伽藍の地割りを検討したが、この場所は塔の想定箇所に該当することから塔関連土坑の可能性は残る。また、同規模の土坑の例として憧竿支柱の柱掘り方の可能性も指摘されている。

○7 トレンチ

7 トレンチは平成11年度にA区として調査を実施した調査区東側に該当する。前回の調査で中門の東側半分が検出され、柱穴の切り合い関係から3時期の中門の存在が確認された。この調査区は国土座標に合わせグリッドを設定し、実測を行っていたが、今回、新たに詳細な座標を設置する目的で中門柱穴抜き取り穴及び区画溝の中央について再度座標計測を実施した。

平成11年度の調査では中門東側半分程度の柱穴を検出したが、今回は作業の日程等のために中門東端の柱穴列までを再度検出することとした。前回の調査時の調査区の形状を残すため、前回の調査区内の東側を東西6.0m、南北11.0mとし、座標計測を実施した。

○伝塔芯礎

木喰五智館西側の市営墓地中央に伝塔芯礎とされる礎石が所在する。規模は長辺1.5m・短辺1.3m・高さ95cmの隅丸方形形状である。この礎石は現地表面に置かれているだけのように見受けられたことから、これまで元位置を保っていない可能性が高いと予想してきた。現状では平坦面を上にし、平坦面中央寄りに馬蹄形の窪みが1つ穿たれている。窪みの規模は長辺22.5cm、短辺17.5cm、深さ6.0cmである。この窪みに関しては柱を固定するためのほぞ穴ではないかとも想定されてきたが、形状からみると後世の加工であろうと思われる。当初、礎石下側も平坦面であろうと予想していたが、今回、礎石を釣り上げた結果、約70cmが地中に埋設されており、下部の形状は山形に突出していた。したがって、天地逆になっている可能性は薄く、両面とも柱座がないことが判明した。置かれていた現状の向きで南と東の側面のみが面取りされており、金堂南東隅礎石の可能性がある。この礎石の西側14mと18m附近にはそれぞれ一つずつの礎石と予想される巨石が所在する。東側礎石は長辺90cm・短辺70cm・高さ60cmの隅丸方形形状、西側の礎石は長辺95cm・短辺60cm・高さ40cmの卵倒形状を呈している。これら2石は全体が表土より突出しており、元位置は保っていない。伽藍の復元から想定すると金堂礎石の可能性が高いが、周辺が墓地であり調査ができないことから明確にはできない。今年度の調査では日程の都合上、礎石の位置検討が十分にできなかつたことから、来年度、礎石が所在していた箇所の調査を実施し、礎石が当時の位置を保っているのか否かを明らかにする予定である。また、それに併せて金堂の基壇痕跡の有無確認も実施する予定である。

《B区の調査》Fig. 6

B区は、昨年度D区として調査を実施した地区的南側に隣接していた農業用倉庫の老朽化に伴い、倉庫が解体されることとなったことから、今回、調査を実施させていただくこととなった。

本地区は推定講堂跡の西側に位置し、講堂に回廊が取り付く伽藍構造の場合、この箇所に東西方向の回廊柱穴列が確認できる可能性が高く、回廊の構造を検討するためには大変重要な地区であった。調査は建物の解体が当初夏場に予定されていたが、年末までずれ込み年明けからとなったことから現在も調査中である。

調査区は農業用倉庫敷地に合わせ南北22.0m・東西6.5mを設定した。

現在までの調査結果、現地表面から約30cm掘り下げるに、アカホヤ火山灰下層の黒褐色ローム層が検出された。遺構の残存状況が良好な場合、アカホヤ火山灰層上層の黒色粘質土上面で柱掘り方や溝肩を検出できるが、本地区の場合は既にアカホヤ火山灰層までが後世に削平を受けていたことから、黒褐色ローム層上面を遺構検査面とした。調査区の南端から北に7.5~9.5m程は近代のたばこ乾燥小屋建設の折りにかなりの攪乱を受けていたが、それより北側に関しては上面が削平されていて了が辛うじて遺構は遺存していた。

調査区からは方形の柱掘り方を有する南北の柱穴列及び円形の柱掘り方を有する柱穴等が確認できた。方形の柱掘り方を有する柱穴列は柱間が南から8尺・(8尺)・8尺・8尺・7尺5寸・8尺5寸・7尺の6間になる。但し、同じ柱筋上北側に8尺離れて円形の柱掘り方が検出されている。また、円形柱掘り方から西に9尺離れ、方形柱掘り方と同一埋土の柱穴痕が確認された。したがって、円形の柱掘り方を北東隅の柱穴痕とすると柱穴列

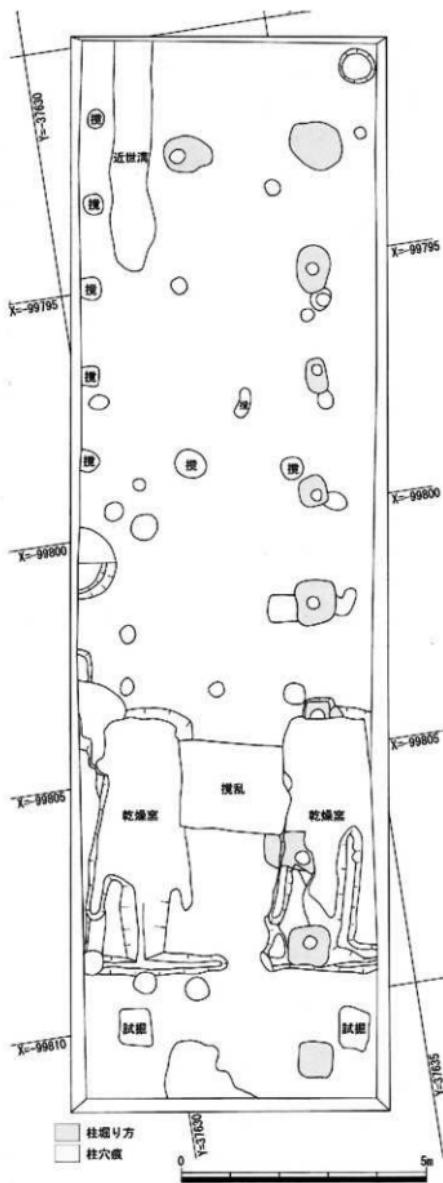


Fig. 6 B区平面実測図 ($s=1/100$)

を東側の柱列にし、西側に延びる建物になる可能性がある。しかし、現時点では南北方向の柱穴列としておきたい。地権者の話では昭和25年頃までこの場所は一段高い土堤になっていたようであり、柵列か築地堀が所在していた可能性が高い。今回の調査で南北方向の柱穴は確認されたが、東西方向の回廊柱穴が確認されなかったことから、回廊は講堂に取り付く構造でない可能性が高くなつた。したがつて、回廊は金堂・講堂に取り付く構造ではなく、また、昨年度のD区でも回廊跡が確認できなかつたことから、講堂を囲む可能性も薄く、伽藍西門や東門まで途切れ、それより北側に関しては柵列等が所在したのか、何ら施設も所在しなかつた可能性が高い。

第3節 小結

今年度の日向国分寺跡の調査は平成17年5月24日から平成18年3月末まで実施する予定である。西都市教育委員会が国庫補助を受け実施する日向国分寺跡の確認調査は平成7年度から実施し、今年度で第11次となる。今年度の調査は過去の調査で推定伽藍内の調査可能箇所の調査がほぼ終了したことから、国土座標が設置されていなかつた遺構の座標計測を最大の目的とした。また、以前から伝塔芯礎とされてきた礎石の是非及び位置検討を行つたため、礎石を元位置から移動し、礎石下部構造等を検討した。また、推定講堂跡と伽藍西門間の農業用倉庫が急遽取り壊されたことから推定講堂跡と回廊の構造を明らかにする目的で調査区を設定した。今年度は木喰五智館東側及び南側をA区、農業用倉庫解体箇所をB区として調査を実施した。

調査の結果、A区では2・3トレンチを新たに設定し、回廊南東隅から現木喰五智館東側までは区画溝は途中で途切れず、南北に延びることを確認した。また、遺構に国土座標を設置したことから区画溝の方向及び溝の廻る範囲が明らかになった。5トレンチの北側を延長し、6トレンチを再度設定し、大型円形土坑の有無確認を実施したが検出することはできなかつた。また、伝塔芯礎が現位置を保っているのか否かは次年度に持ち越されることとなるが、天地逆の可能性はなくなつた。

B区は東西方向に延びる回廊柱穴の検出を期待していたが、新たに南北柱穴ないし南北建物が存在した可能性が高くなつた。新たな施設が想定されたことから、回廊は金堂・講堂には取り付かず、また、講堂北側も廻らず、伽藍西門付近で途切れている可能性が高くなつた。

今回の調査は過去に調査を実施してきた箇所の座標計測、伝塔芯礎が元位置を保っているのか否かの確認、推定講堂西側に所在する農業用倉庫下の回廊柱穴検出を目的とし調査を実施した。漸く日向国分寺跡の伽藍配置が金堂及び塔などの中心建物の形状や位置は明らかにできないものの、講堂・中門・回廊等の建物配置や区画溝の規模などが明らかになってきた。日向国分寺跡の伽藍内確認調査については、当初、今年度の調査をもって確認調査を一度中断し、過去の調査をまとめた本報告書を刊行し、国指定を目指す予定であった。しかし、今年度までの調査で金堂基壇痕跡及び伝塔芯礎の位置の検討が終了できなかつたことから、来年度まで調査を実施する予定である。また、これに併せて、西塔配置の可能性もあることから伽藍西側の調査、また、区画溝北東端を確定するため伽藍北東側の調査を実施する予定である。但し、過去11次にわたる膨大な遺構・遺物の報告書作成に伴う整理作業は来年度から実施し、本報告書は平成19年度に刊行予定である。

日向国分寺跡周辺は今年度も宅地開発が進み、年々開発の波が押し寄せてきている。伽藍内の構造もかなり明らかになり、今後、早急な遺跡の保護、現況の確保を進めていかなければならない。

図 版 (PLATES)

図版目次

P.L. 1

1. 1 トレンチ完掘状況セクション前(東より)
2. 1 トレンチ完掘状況セクション後(東より)
3. 1 トレンチ区画溝南壁土層堆積状況(北より)
4. 2 トレンチ掘削状況(北より)
5. 2 トレンチ掘削状況(西より)
6. 2 トレンチ区画溝内遺物検出状況(西上より)

P.L. 2

7. 3 トレンチ遺物出土状況(南東より)
8. 3 トレンチ遺物出土状況(南西より)
9. 3 トレンチ遺物出土状況(北西より)
10. 3 トレンチ区画溝掘削状況(南より)
11. 3 トレンチ区画溝内遺物出土状況(南より)
12. 3 トレンチ区画溝完掘状況(南東より)
13. 4 トレンチ遺構検出状況(南より)
14. 4 トレンチ区画溝・回廊柱穴検出状況(北より)

P.L. 3

15. 4 トレンチ遺構検出状況(北西より)
16. 5 トレンチ遺構検出状況(北より)
17. 5 トレンチ遺構検出状況(北より)
18. 5 トレンチ北側遺物出土状況(北より)
19. 5 トレンチ北側遺物出土状況(北東より)
20. 5 トレンチ北側搅乱半蔵状況(南より)
21. 5 トレンチ北側搅乱半蔵状況(南西より)

P.L. 4

22. 6 トレンチ土坑完掘状況(南西より)
23. 6 トレンチ土坑完掘状況(北西より)
24. 6 トレンチ土坑完掘状況(東より)
25. 6 トレンチ北側土坑近景(北西より)
26. 伝塔芯礎現況(南より)
27. 伝塔芯礎現況(西より)
28. B 区遺構検出状況(南より)



1. 1 トレンチ完掘状況セクション前(東より)



2. 1 トレンチ完掘状況セクション後(東より)



3. 1 トレンチ区画溝南壁土層堆積状況(北より)



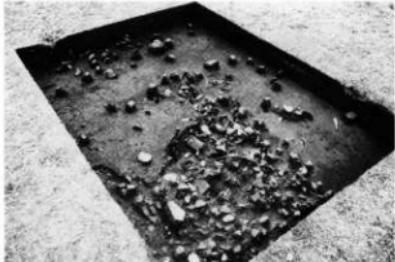
4. 2 トレンチ掘削状況(北より)



5. 2 トレンチ掘削状況(西より)



6. 2 トレンチ区画溝内遺物検出状況(西上より)



7. 3 トレンチ遺物出土状況(南東より)



8. 3 トレンチ遺物出土状況(南西より)



9. 3 トレンチ遺物出土状況(北西より)



10. 3 トレンチ区画溝掘削状況(南より)



11. 3 トレンチ区画溝内遺物出土状況(南より)



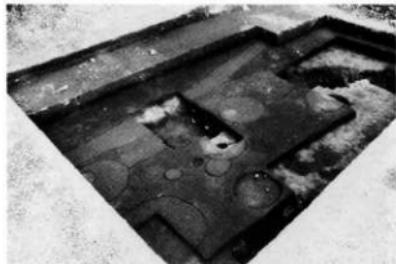
12. 3 トレンチ区画溝完掘状況(南東より)



13. 4 トレンチ遺構検出状況(南より)



14. 4 トレンチ区画溝回廊柱穴検出状況(北より)



15. 4 トレンチ遺構検出状況(北西より)



16. 5 トレンチ遺構検出状況(北より)



17. 5 トレンチ遺構検出状況(北より)



18. 5 トレンチ北側遺物出土状況(北より)



19. 5 トレンチ北側遺物出土状況(北東より)



20. 5 トレンチ北側搅乱半裁状況(南より)



21. 5 トレンチ北側搅乱半裁状況(南西より)



22. 6 トレンチ土坑完掘状況(南西より)



23. 6 トレンチ土坑完掘状況(北西より)



24. 6 トレンチ土坑完掘状況(東より)



25. 6 トレンチ北側土坑近景(北西より)



26. 伝塔芯礎現況(南より)



27. 伝塔芯礎現況(西より)



28. B区遺構検出状況(南より)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくつちょうさかくようほうこくしょ				
書名	市内遺跡発掘調査概要報告書				
副書名	日向国分寺跡				
卷次	第11集				
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	第46集				
編著者名	笠瀬明宏				
編集機関	西都市教育委員会				
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111				
発行年月日	西暦 2006年3月31日				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村	遺跡番号				
ひのうがくくじんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおざきみやあさこくぶ 大字三宅字国分	452084	1028	(日本測地系) 32° 05' 55"	(日本測地系) 131° 23' 55"	20050524	
				32° 05' 57"	131° 23' 58"	20060331	371
				(世界測地系) 32° 06' 07"	(世界測地系) 131° 23' 46"		
				32° 06' 10"	131° 23' 49"		

調査原因	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
遺跡所在確認に伴う確認調査	社寺跡 (国分寺)	奈良～平安	区画溝1条 方形柱掘り方柱穴 円形柱掘り方柱穴	軒先瓦片 丸・平瓦片 土師器・須恵器片 陶磁器片	

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第46集
「市内遺跡発掘調査概要報告書 XI」
日向国分寺跡
平成18年3月31日発行
編集発行 西都市教育委員会
印刷所 吉永印刷

